友好の架け橋へ

国際ボランティア学生協会
日本大学 4 年 川島 涼

当協会は、日中緑化交流基金の助成を受け、中国青年国際人材交流中心を現地カウンターパートに計画を進め、2004 年より緑化率向上に向けた活動を毎年行っています。また日中の青年たちが共に作業を行い、汗を流し、寝食を共にして相互理解を深めることで、日中友好の促進と発展を目指すことを目的とした活動を行っています。本年度は吉林省白城市で 9 月 5 日～14 日までの 9 日間、16 大学 30 名の学生が参加しました。

羽田空港から北京へ 3 時間、北京から 12 時間寝台列車に乗り、活動場所となる吉林省白城市へ到着しました。白城市の学生 25 名、カウンターパートや植林地のスタッフを含めた 40 名の現地の方々が温かく迎えてくれ、まずはお互いに自己紹介をし、言語の壁を感じさせない程交流を楽しみました。

交流タイムを終え、4、5 人のグループを作り障子松の植林作業を開始します。植林する障子松は全て小渕基金で購入したもので、基金があるからこそ、この活動が成り立っていることを再認識し、作業に取り掛かりました。十分な広さと深さの穴をスコップで堀り、木が曲がって育たないよう地面から垂直に植え、雨などの水分が中心に集まるよう土を均す。全員真剣に管理員の方々の説明を聞き、単純作業であるからこそ一本一本丁寧に植えていくことを意識し、作業に取り組みました。この日は過ごしやすい天気の中、「エ～ッサ!」と全員で掛け声を上げながら、終始元気に活動を行いました。重い装備を相互に持ちあう等互いに気を使いながら協力して進めていき、この日は約 700 本の苗を植えることが出来ました。

翌日、朝から曇り空が怪しく、活動直前から雨が降

り出しました。全員雨具やタオルを用意し、雨の中活動を始めました。「少しでも多く、1本でも多く苗を植えたい。」全員がその一心でドロだらけになりながらも作業を進めていきました。「エ～ッサ！」という掛け声は先日よりもさらに大きくなり、まるで国境を越えた学生たちが天に挑んでいるようでした。作業は約3時間で終了し、悔しい想いが残る一方、両国の学生が共に雨の中協力して全力で取り組めたことは非常に価値のあるものとなりました。

活動を通して両国の学生が交流する中で互いを知り、汗を流し、寝食を共にし、「朋友」となることで、民間による日中友好の架け橋が強固なものになっていくのではないかと思っています。今後も多くの関係者のご協力の元、環境問題という国境を越えた共通の課題に挑むことで、中国の緑化活動、そして日中学生の交流をこれから先何年何十年も継続し、拡大していけることを願っています。